

パネル

刊行している。近世や近代ではなく、そのはるか以前に弘法大師・空海を通じて景教（アジアに宣教したキリスト教異端ネストリウス派の教え）が日本に伝来し、仏教（真言密教）と習合したと主張、キリスト教と仏教の教えはもともと同根であったとする仏耶一元論を提唱した。また古代の日本には、渡来人の秦氏として多量のユダヤ人が移民していたという日ユ同祖論を展開、東西の信仰を一つにつなぐ新たな救世主として弥勒を位置づけていた。外国人女性としてはじめてシカゴで開催された万国宗教者会議に出席した僧侶の一人である高野山管長の土宣法龍より真言宗の戒名を与えられ、高野山奥の院に大秦景教流行中国碑のレプリカを建立（一九一一年）、その傍らに葬られることになった。

早稲田大学図書館、高野山大学図書館には夫人が生前に蔵書を寄贈したゴルドン文庫が存在している。特に早稲田大学に残された約一五〇〇冊の洋書類は、一九世紀に英語圏で刊行された東西の宗教学、神秘思想に関する重要な文献を集大成したかのような非常に特異なアーカイヴを構成している。ブラヴァツキー、アニー・ベザント、チャールズ・リードビーターなど神智学関係の書籍も多い。直接教えを受けた学問の師であるマックス・ミュラー、夫人を日本に導いた高楠順次郎、さらには来日後にも親密な関係が続けた下田歌子など、その人間関係においてもヨーロッパの比較宗教学とアメリカの神智学、日本の近代仏教学および宗教学を相互に結び合わせる重要な結節点となるような人物であった。

鈴木大拙における東洋と西洋

——在米中の思想変遷を中心に——

守屋友江

本発表では、長期にわたる鈴木大拙の宗教的求道における、初期のアメリカ滞在時代の意義を考察する。その時代は世紀転換期にあたり、アメリカの宗教思想自体も大きく変化し、またヨーロッパでは「仏教」が新たに発見され始めた時期に相当する。こうした変化や発見を経験する中で、鈴木は後年の「東洋と西洋」を対比する思想軸、言語よりも宗教的精神そのものの直接的把握というスタンスを養うこととなった。

渡米以前、鈴木は東京帝国大学で哲学を学びながら円覚寺で参禅する中で、新時代にふさわしく、西洋の科学的知識と抵触しない宗教に理想を求めていた。しかし、鈴木は渡米先で勤めていたオープン・コート出版社のポール・ケーラスの合理的な宗教観（鈴木という「科学教」には次第に否定的となっていた。理論的な宗教観への距離と反比例する形で、スウェーデンボルグや神智学へ接近するようになる。また、ウィリアム・ジェイムズの著した『宗教的経験の諸相』を、「宗教心」に富んだものとして評価する姿勢も強く示す。

興味深いのは、これと並行して宗教に基づく社会変革への言説も非常に多くなることで、「新仏教徒同志会」の綱領と相通ずる内容となっている。実際に、彼は帰国後に同会の評議員と

なつて、廃刊に至るまで五〇本以上のエッセイを寄稿していた。一見して異なる方向性のようなが、宗教に基づく社会変革には旧来の仏教を刷新することが不可欠であり、その推進力となるのは科学ではなく、「宗教心」であると理解されていたのである。

アメリカから日本を眺め、また欧米における「東洋」理解を知るといふ経験はまた、西洋と対等の東洋、という越境的視点を鈴木に抱かせることになった。東アジアの大乗仏教についてまだ評価の低かった欧米へ向けて、あらたに大乗仏教の意義を説いていこうとする宣教師的使命感を強く抱くようになる。かくして、英語で大乗経論や東洋思想を紹介するエッセイが次々と著されるようになる。

アメリカにおける神智学的な「仏教」観、「原始仏教」の重視など、日本と異なる「仏教」受容をみて、鈴木はいわば対機説法的な方法で次々とエッセイや著作を生み出した。その対機説法的言説に現れるのは、「個体的、事實的、分別的」な「西洋」と「没入的、瞑想的、直覺的」な「東洋」であり、それらはのちの「日本的靈性」論や精神分析の援用を彷彿とさせるものがある。しかし彼は東洋対西洋という二元論に終始するだけでなく、東西に共通する「理」を見いだそうとする。そこから、禅や華嚴の哲学と、スウェーデンボルグやキリスト教神秘主義を同時にみる「発見」があったのである。

今日、「大乗仏教と禅の西洋への紹介者」といわれる鈴木は原型は、このようにアメリカ時代に培われたのだが、彼が仏教学者としてではなく、仏教者として数多くの言説を著したこと

は留意すべきである。サンسكريットやパーリ、チベット語を操るアカデミックなテキストの分析が主眼なのではなく、ジェームズらによって言説化された「宗教心」に基づいて、宗教的経験を表現するための宗教言語の模索こそ鈴木が目指すところであつたのだ。この饒舌な不立文字というべき彼の宗教的求道は、近代における「仏教変革」の貴重な実験として、大きな思想的意味をもつといえるのであり、その揺籃期がアメリカ滞在の時期であつたといえる。

パネルの主旨とまとめ

吉 永 進 一

明治期における日本仏教の国際化は、すでに移民と仏教、植民地と布教といった文脈で論じられてきているが、ここでは仏教の「輸出」「輸入」といった一方向的な運動ではなく、同時多発的に変貌していった欧米の宗教状況との相互影響関係という複眼的な視点から近代仏教史を捉えなおしたい。十九世紀の欧米において仏教への関心の背景には、支配的なキリスト教組織に批判的なスタンスをとる、新たな靈性思想を奉じる人々がいた。具体的に言えば、秘教的なスウェーデンボルグ主義者、神智学徒、あるいはユニテリアンなどである。彼らはすでに仏教について一定の理解と誤解をもち、そこに合理性と道徳性を備えた理想的な宗教を見出した。日本仏教が、一方で西洋哲学